

アガサ・クリスティーの前書き

日吉和子*

The First-Type Forewords in Agatha Christie's Detective Stories

HIYOSHI, Kazuko*

Abstract

In a previous paper, the author studied the forewords in detective stories by Agatha Christie, John Dickson Carr, and Ellery Queen. These forewords are classified into two types. The first type consists of dedications to people containing names, with or without short personal messages. The second type is made up of several sentences and sometimes paragraphs. Of his 48 books, Carr has only five first-type forewords and one second-type. His forewords are usually shorter than those of the other two writers. In his 26 books, Queen has only two first-type forewords. One of his books has not only a first-type but also a second-type forewords with a list of characters. Four of his books have second-type forewords, all of which are lengthy. Lastly Christie has many more forewords than the other two writers, 58 in 90 books of hers. In the previous paper, only twelve second-type forewords of Agatha Christie were discussed. In this paper, the author studies the rest of her first-type forewords.

* 城西大学語学教育センター准教授

はじめに

前回の「探偵小説における前書きの特徴 アガサ・クリスティー、ジョン・ディクソン・カー、エラリー・クイーン」¹⁾という題名の論文の中で、上記三名の作家の前書きの特徴を考察した。その際、クリスティーの場合は、余りにも数が多いため第二タイプ（文庫翻訳版で1ページ以上に渡る長さを持つ前書き）に属する12作品の前書きを比較対象として論じた。今回は彼女の残りの作品（前回と重複するもの2作品と新たに4作品を加え、全体で52作品）の第一タイプの前書きについて見てゆくことにする。前回定義した第1タイプの前書きには、その形式上2種類ある。一つは、家族や知人等1人や2、3名の人物名を挙げるもの、そして、それに短いコメントが付け加えられているものである。それらは共に献辞タイプに属するものである。それゆえに、ここでは分類上は前書きという言葉を使うが、個々を論じる時には献辞と言う言葉を使っている。それでは、2つの種類別に見てゆくことにする。

第一形式の前書き

a. 名前だけの前書き

名前だけの前書きは、11作品で見つかっている。それらは、1. “Sad Cypress”（邦題『杉の柩』）、2. “Lord Edgware Dies”（邦題『エッジウェア卿の死』）、3. “Five Little Pigs”（邦題『五匹の子豚』）、4. “They Do It With Mirrors”（邦題『魔術の殺人』）、5. “The Murder at the Vicarage”（邦題『牧師館の殺人』）、6. “Death in the Clouds”（邦題『雲をつかむ死』）、7. “Cat Among the Pigeons”（邦題『鳩のなかの猫』）、8. “Dead Man’s Folly”（邦題『死者のあやまち』）、9. “Star Over Bethlehem”（邦題『ベツレヘムの星』）、10. “Third Girl”（邦題『第三の女』）、11. “Passenger To Frankfurt”（邦題『フランクフルトへの乗客』）²⁾である。

1. は「ピーターとペギー・マクラウドに」（To Peter and Peggy McLeod）となっている。『アガサ・クリスティー自伝』（これ以降『自伝』と呼ぶ）の中で、バグダット旅行中に会ったシリアのモスル市で病院を経営する共に医師の夫婦として紹介されている。

2. では「キャンベル・トンプソン博士夫妻に捧ぐ」（To Dr and Mrs Cambell Thompson）となっている。『自伝』と『アガサ・クリスティー大事典』（これ以降『大事典』

と呼ぶ)によると、キャンベル・トンプソン博士は、イラク北部のニネヴェで考古学上の発掘をしていた人物で、クリスティーの夫のマックス・マローワンも誘われ、クリスティーも同行し、その発掘に参加している。この作品はこの頃に執筆されたもので、原稿が完成した時、この夫妻にその「原稿全部を声を出して呼んで聞かせた」こと、さらに、彼女の「家族以外の人」^{a)}に対してそれをしたのは彼らだけであると『自伝』の中で書いている。さらに、“I had become deeply attached to both C. T. and Barbara.”^{b)}と書くほど親しい関係にあった夫妻である。

次に、3.では「スティーヴン・グレンヴィルへ」(To Stephen Glanville)となっている。クリスティーは『自伝』の中で、この人物がエジプト学教授で、彼の紹介で夫のマックスが空軍に入ることになり、空軍省で彼と同じ部屋にいたこと、さらに、第二次世界大戦中の食糧難の際に食料を分け合ったエピソードなども書いている。この親交がこの献辞に繋がったと推測される。一方、彼は1943年にクリスティーに古代エジプトについての探偵小説を書くように話し、6冊以上のエジプト関連の本を貸してくれた人物でもある。その資料を読み、クリスティーは構想を練り始め、いろいろの質問や資料を彼に請求し、小説の結末についても彼と論争したことが述べられている。その結果、誕生したのが、『死が最後にやって来る』(“Death Comes As the End”)である。この作品の献辞に関しては前回既に言及しているのでここでは省くが、この本は当然と言えるが、このグレンヴィルに捧げられている。『大事典』では、彼は、クリスティーの親族以外で「2冊の本…を捧げられるというめったにない榮譽に浴したことになる」^{a)}と評している。

それぞれの献辞対象者との関係を考慮すると、後で論じる第二形式の前書きで用いる5つの内容別分類では、上記の3つは、「旅行・考古学関係」の献辞として分類されることができる。

次に、4.の献辞は「マシュー・プリチャードに」(To Mathew Prichard)とある。彼はクリスティーの孫である。さらに、5.は「ロザリンドへ」(To Rosalind)となっている。彼女は、クリスティーの一人娘で、ヒューバート・プリチャードと結婚してプリチャード姓になる。つまり、マシューの母親である。この2つは内容的に見て「身内・親類関係」の献辞に分類される。

これらの名前だけの献辞は、よほどクリスティーの私生活を詳しく知らない限り、本を献呈されているそれぞれの人物とクリスティーの関係は分からないであろう。その観点から、この種の献辞は一般読者に向けられたものではなく、まさに献辞対象者だけに向けられた彼女からの私的な思いを込めたものと言えるだろう。

次に述べる 6. から 10. までの献辞にもこれは当てはまるだろう。6. では「オーマンド・ビードルに」(To Ormond Beadle)、7. では「ステラ・カーワンとラリー・カーワンに」(For Stella and Larry Kirwan)、8. は、「ハンフリー&ペギー・トレヴェルヤンに」(To Peggy and Humphrey Trevelyan)、9. は「ハイディーに捧ぐ」、10. は、「ノラ・ブラックモアに」(To Norah Blackmore)、11. は「マーガレット・ギョームに」(To Margaret Guillaume) である。これらの名前は、いずれも『自伝』の中で特に言及箇所が見当たらない上に、名前のみであり、特定の明確なメッセージが無いことから、この献辞は読者向けではないと言えるだろう。

b. 「友人」などの短い言葉が付いた前書き

上記の前書きに加えて、「友人」などの短い言葉が付いた前書きが 3 作品に付いている。それらは、12. “The Moving Finger” (邦題『動く指』)、13. “Three Act Tragedy” (邦題『三幕の殺人』)、14. “Murder in the Mews” (邦題『死人の鏡』) である。

12. では「わが親友 シドニーとメアリー・スミス夫妻に捧げる」(To my friends Sydney and Mary Smith) となっている。彼女の『自伝』によると、シドニーは大英博物館のエジプト・アッシリア部の管理者である。『自伝』の中で、クリスティーは、「何かについての彼の見解は、他の人の誰とも違って、三十分も彼と話をしていると、頭の中にたたき込まれた考えにひどく刺激されて、家を出るときにはまるで宙に浮いて歩いているような気持ちにさせられる…あらゆる点で彼と論争したくなる」、また、「ひとたび彼の友達になったら、いつまでも彼の友達である」、「ちょうど昔のギリシャの哲学者みたいに座り込み、わたしはその足もとに座って、彼の忠実な弟子のような気持ちを味わった」と述べている。さらに、シドニーはクリスティーの探偵小説を読み、他の人とは違う批評をし、彼女が思っている評価とは反対の評価を下していたとも書いている。このような彼との関係はこの献辞だけでは、一般読者には読み取れないことから、これも読者向けの献辞ではないと判断できる。そして、上記の『自伝』の内容から、彼はクリスティーの考え方にさらに彼女の小説の構想にも何等かの影響を与えた可能性が考えられる。その視点に立つと、これは「作品関係」の献辞に入れることができるだろう。

さらに、13. では、「私の友人、ジェフリーとヴァイオレット・シップストンに捧げる」(Dedicated to My Friends, Geoffrey and Violet Shipston)、14. では「愛をこめて 旧友シビル・イーラーへ」(To My Old Friend Sybil Heeley With affection) となっている。そしてここに 15. “Elephants Can Remember” (邦題『象は忘れない』) を加えておく。

その献辞は「モリー・マイヤーズへ たいへん親切にしてくださったお礼に」(To Molly Myers in return for many kindnesses) とある。これは、第二形式に属するが、13、14. 同様に現在の段階では人物特定(延いて内容分類)ができないためである。ここまでの献辞は全て、クリスティーの相手に対する私的な思いを献辞と言う形で表わしたものと言える。

c. 第二タイプの前書き付きの前書き

名前のみのタイプであるが、その後ろに第2タイプの前書きが付いているものが2作品あった(この2作品の第2タイプの前書きは既に前回の論文内で論じられているのでここでは言及しないことにする)。それは、16. “The Thirteen Problems” (邦題『ミス・マープルと十三の謎』)と17. “The Body in The Library” (邦題『書斎の死体』)である。

16. では、「レオナルドとカサリン・ウーリイに」(To Leonard and Katherine Woolley)となっている。『自伝』や『大事典』にもあるように、クリスティーがバグダッドへの旅行中にウル市で世話になり、親友となった夫妻である。そのレオナルドの発掘の助手をしていたのがその後クリスティーの夫となるマックス・マローワンである。クリスティーの人生にとって忘れることができない重要な出会いのきっかけを与えた夫妻ということになる。それゆえに、クリスティーの『自伝』の「二度目の春」の章の中で頻繁に彼らが登場している。これらの状況と彼らとの親交に対するクリスティーの思いの表れがこの献辞である。これも、このような状況や彼女との関係を知らない読者には単なる名前に過ぎないことを考えると、明らかに読者向けではないと言える。

17. では「わが友、ナンへ」(To My friend Nan)となっている。これはナン・ワッツ(ナン・コン)のことである。クリスティーは、メアリー・ウェストマコットの名義で『愛の旋律』(“Giant Bread”)を出版した。誰も彼女の作品であると気づかず「15年も秘密にしておくことができた」^{a)}。その1、2年後に同じ名義で『未完の肖像』(“Unfinished Portrait”)という小説を書いた時、作中の言葉遣いからそれがクリスティーの作品であると気づいた唯一の人物がナンである。彼女との出会いは姉とジェームズ・ワッツの結婚式で、その後、生涯の友となる。彼女に関してクリスティーは自伝の中で、“Nan is one of the friends I miss most now. With her, as with few others, I could talk together of Abney and Ashfield and the old days, the dogs...and the theatricals we got up and acted in.”^{b)}と書いている。何でも話せる友人であったことが分かる。

この2つの献辞は、前者は「旅行・考古学関係」、後者は「身内・親類関係」の献辞に

分類できる。

第二形式の前書き — 短いコメント付き

a. 作品関係

ここからは、名前の後に1行から2行の短いコメントが付いたものを見て行く。全体でこの種に属するものが35冊で見つかっている。それらの献辞のコメント内容により5つのグループに分けて見てゆく事にする。最初は、作品に関係するもので、9作品がそれに該当する。それらは、18. “The Peril At End House” (邦題『邪悪の家』)、19. “Hallowe'en Party” (邦題『ハロウィーン・パーティ』)、20. “Mrs McGinty's Dead” (邦題『マギンティ夫人は死んだ』)、21. “Ordeal by Innocence” (邦題『無実はさいなむ』)、22. “A Pocket Full of Rye” (邦題『ポケットにライ麦を』)、23. “The Labours of Hercules” (邦題『ヘラクレスの冒険』)、24. “The Man in the Brown Suit” (邦題『茶色の服の男』)、25. “The Hollow” (邦題『ホロー荘の殺人』)、26. “The Mirror Crack'd From Side To Side” (邦題『鏡は横にひび割れて』)である。

18.には「イーデン・フィルポッツに むかし、私に送っていただいた彼の友情と激励にはどんなくも感謝しています」(To Eden Philpotts To whom I shall always be grateful for his friendship and the encouragement he gave me many years ago) という献辞が付いている。『自伝』によると、母親の勧めで短編小説を書き始めた彼女が行き詰まっている時に彼女の原稿を読み助言をしてくれたのが「隣人で、家族ぐるみの個人的な友人であった」^{a)}この人物である。そして、著作権代理人のヒューズ・マッシーを紹介してくれたのも彼である。『大事典』でも、彼は「小説家にして詩人」であり、彼女の「作品を読んだ最初のプロの作家」で、彼女に「助言と励ましを与え、作家としての壮大な行路へとクリスティーを送り出した」^{b)}人物であると解説している。彼は彼女の作家としての出発点に影響を与えた人物である。

19.では「P・G・ウッドハウスに 彼の本と物語は長い間わたしの生活を明るくしてくれた。また、親切にもわたしの本を楽しく読んだとおっしゃってくださったことに対する喜びをこめて」(To P.G. Wodehouse whose books and stories have brightened my life for many years. Also to show my pleasure in his having been kind enough to tell me that he enjoys *my* book) とある。『大辞典』でもこの献辞が書かれているが解説はない。この人物は、クリスティーと同時代に生きていた作家であることを考慮に入れると、『ジ-

ヴズ』と言う英国の上流階級の生活を描いたユーモア小説の作家の“P・G・Wodehouse” (1881-1975) のことと思われる。彼は同業者として彼女の創作活動に励みを与えてくれた人物と言えるだろう。

20. の献辞は「ピーター・サンダーズに あなたのご親切を感謝して」(To Peter Saunders in gratitude for his kindness to authors) である。この人物は『大事典』によると、『『ねずみとり』などクリスティーの戯曲の大半を上演した」「プロデューサー」^{a)} である。クリスティーの『自伝』の中でも彼女の作品の舞台上演に関する箇所たびたび登場し、彼女に助言をしたり励ましたりした彼女の良き相談相手である。

21. では「ビリー・コリンズに——愛情と感謝をこめて」となっている。この人物はクリスティーが『アクロイド殺し』(“The Murder of Roger Ackroyd”) を出版した際の新たな出版社ウィリアム・コリンズ社の社長である。『大事典』によると、彼の説得に応じて、1926年にジョン・レインのボドリー・ヘッド社からコリンズ社に出版社を変えている。『自伝』ではヒューズ・マッシーが「新しい出版社を選定してくれた」となっている。

22. では、「私の初期の短編に出版の機会を与えてくれたブルース・イングラム氏に本書を捧ぐ」となっている。彼は、クリスティーのポワロものの短編を1923年に発表した『スケッチ』誌の編集者である。クリスティーの最初のポワロ作品、『スタイルズ荘の怪事件』(“The Mysterious Affair at Styles”) (1920年) が出版され、それを気に入ったイングラムが彼の『スケッチ』誌にシリーズ物で12話書くように提案したこと、そしてその提案に彼女が喜んで応じ、彼女は8作品で十分だと思ったが、結局は残りを急いで書くことになったことなどが『自伝』に書かれている。

23. では、作品中でポワロが12の「難業」に挑むことに関連付けて「エドモンド・コークへ その難業に対し、エルキュール・ポアロになりかわって深謝し、愛をこめてこの本をささげます」(To Edmund Cork of whose labours on behalf of Hercule Poirot I am deeply appreciative this book is affectionately dedicated) と書いている。この人物はクリスティーが彼女の本を出版するための新たな出版社と著作権代理人を捜している時に、フィルポツから推薦されていた人物の代わりに対応した人である。伝記の中で“Dear Edmund Cork, my agent” (愛するエドモンド・コーク、私の著作権代理人) と言及されているように、著作権代理人としてその後40年以上の付き合いとなる。

以上3つの献辞は彼女の出版関係者に宛てたものとなる。ところで23.に関してはコークと言う人物を知っていたとしても、読者にはこの献辞だけでは、虚構の世界のポアロと「難業」とコークとの関係が分からない。その点で、これは後に言及する「謎めいたコメ

ント」付きの献辞にも分類されるだろう。

以上、18. から 23. までは彼女が作家としての人生をそれぞれの分野で支えた人々である。一般読者は、彼女が付けたコメントからその人物との関係を窺い知ることができると言う意味で、彼女が意図したかどうかは定かではないが、少しでも読者の方を向いた献辞と言えるだろう。

次に、24. では、「E・A・Bに本書をささげる ある旅の思い出と、いくつかのライオンの物語、そしていつか『ミル・ハウスの謎』を書くようにと私にすすめてくれたことに感謝して」(To E.A.B In memory of a journey, some lion stories and a request that I should some day write the 'Mystery of the Mill House') とある。謎めいた頭文字だけの、E・A・Bとは『大事典』によると、最初の夫アーチボルド・クリスティーの友人のアーネスト・R・ベルチャー少佐^{a)} のことである。献辞では、その名前のミドルネームが共にA.になっているが、その内容と『自伝』で語られているエピソードから、この人物はベルチャー少佐であると断言できる。『自伝』によるとベルチャー少佐が彼の「自宅のミル・ハウスに由来する」「『ミル・ハウスの怪事件』という作品」を書き、彼自身をその中に登場させてくれるように頼んだ時、クリスティーは“I can't do anything with real people. I have to imagine them.”(「実在の人物は扱えない」、「想像の人物でなくちゃだめ」)^{b)} と言って一旦は断わっている。ちなみに、これは前回『書斎の死体』(“The Body in the Library”)の献辞でも言及しているクリスティーの創作観を示すもので、非常に興味深い記述である。しかし、残念ながら、この献辞からクリスティーのその様な創作観を読者は読み取ることはできない。ところで、その後もベルチャーが作品に登場したいと頼んだことから、“It is, I think, the only time I have tried to put a real person whom I knew well into a book...”「よく知っている実在の人物を小説の中に入れる試みをした唯一の場合」^{c)} となったと彼女は書いている。最終的に、題名は『茶色の服の男』になるが、少佐を作品内に登場させている。これに関して、『大事典』では、「クリスティーが外部からのプレッシャーに譲歩した実にまれな例である」^{d)} と解説している。この作品が誕生するまでの経緯は、この様に『自伝』の中に詳しく書かれている。しかし、この献辞に作品誕生の裏話が込められている事など出版当時の一般読者には、知る由もなかったであろう。この『茶色の服の男』が、実は、献辞に登場する『ミルハウスの怪事件』であるとは気づかず、いつかこの献辞に登場する題名の作品が書かれると考える読者もいたのではないかと推測される。その意味で、「謎めいたコメント」付きの献辞とも言える。ところでこの献辞には、実際の本の題名とは違うとは言え、作品名という情報が入られているこ

とから、一般読者にも向けられている可能性が考えられる。

次に、25. では、「ラリーとダナーに捧げる 彼らのプールを殺人の舞台に使わせてもらったことへの謝意を込めて」(For Larry and Danae With apologies for using their swimming pool as the scene of a murder) と書かれている。『大辞典』によると、この作品は「『ブラックコーヒー』(“Black Coffee”)と『邪悪の家』(“Peril at End House”)という芝居でポワロを演じた」「イギリスの舞台俳優フランシス・L・サリヴァン夫妻の実在の家をモデルにしている」^{a)} ことに対する謝辞である。『自伝』の中で第二次世界大戦中に彼らの家に滞在した話が紹介されている。「戦争中に俳優の家に滞在するのはわたしにとっていつも心の安らぎになった」^{b)} と述べている。クリスティーにその意図があったかどうかは知る由もないが、作品の舞台は現実世界にあるという彼女の創作観が示されている献辞である。

26. はクリスティーの作中の人物を演じる俳優に対するもう1つの献辞で、「マーガレット・ラザフォードに 賞賛をこめて」(To Margaret Rutherford in admiration) となっている。『大事典』によると、この人物はこの作品の主人公ミス・マーブルを演じた女優である。クリスティーはこの女優が演じるマーブルの「映画をまったく気に入らなかった」が女優としては「たいへん尊敬していた」と解説されている。この2つの献辞によりこれらの人物の身元を識別できた読者はクリスティーが自分の作品の舞台化や映像化に関心があったこと、さらに実際に親交があったことを知るだろう。その意味で、この2つの献辞は限られた一般読者向けの献辞と言える。

b. 旅行・考古学関係

次に旅行と考古学関係の前書きである。クリスティーは旅行が好きで、旅先で出会った考古学者と再婚している。その再婚した考古学者の夫に同行し、彼女もイラクやシリアに毎年のように行っていた。そんなクリスティーらしい旅や考古学関連の前書きが、7作品で見つかっている。それらは、27. “Death on the Nile” (邦題『ナイルに死す』)、28. “Destination Unknown” (邦題『死への旅』)、29. “A Caribbean Mystery” (邦題『カリブ海の秘密』)、30. “Evil Under the Sun” (邦題『白昼の悪魔』)、31. “Appointment with Death” (邦題『死との約束』)、32. “Murder in Mesopotamia” (邦題『メソポタミヤの殺人』)、33. “They Came to Baghdad” (邦題『バグダッドの秘密』) である。

27. では、「私と同じように、世界をさまよい歩くのが好きなシビル・バーネットに捧ぐ」(To my old friend Sybil Bennett who also loves wandering about the world) とあ

る。このシビル・バーネットとは、バイルート行きの船上で出会ったアルジェ駐在の空軍少将チャールズ・バーネット卿の妻である。最初クリスティーは「あの女、わたしはきらいだ。あの女の帽子がいやだし、キノコ色をした彼女のストッキングもきらい」と思っていたと『自伝』の中で書いている。相手もクリスティーに対して同じ思いを抱いていたが、その後友人となる人物である。

28. では「わたしと同様に外国旅行が大好きなアンソニーに捧ぐ」(To ANTHONY who likes foreign travel as much as I do) となっている。この人物はクリスティーの娘のロザリンドが最初の夫の戦死後1949年に結婚したアンソニー・ヒックスのことである。『自伝』によるとラジオドラマ用として書いた「三匹の盲目のねずみ」(“Three Blind Mice”)という短い脚本を舞台用に書き直した際に、既に同名の劇があったことから新たな題名が必要となり、「ねずみとり」(“The Mousetrap”)という題名を提案したのがこの娘婿であった。これは「身内・親類関係」の献辞にも入る。

29. では「西インド諸島訪問の楽しき思い出とともに 旧友ジョン・クルックシャンク・ローズに本書を捧げる」(To my old friend John Cruickshank Rose with happy memories of my visit to the West Indies) と言う言葉が添えられている。『自伝』によると、彼はウル市に住む建築設計士で、アルパチャ(35.で言及する)という考古学的発掘に参加するようにマックス・マローワンに説得され参加した人物である^{a)}。彼は、『大事典』によると、クリスティーとマックスを「何度か西インド諸島でもてなした」^{b)}人物である。この作品は西インド諸島が舞台となっており、「作品関係」にも分類できる。

30. では「シリアでの前回の思い出に寄せて」(To John In memory of our last season in Syria) と言う献辞がある。この人物は、状況的に考えて、29.との関連からジョン・ローズの可能性が考えられる。仮にそうだとすると、3.の中で引用した『大事典』の親類以外に2度献辞が「与えられるめったにない榮譽に浴した」キャンベル・トンブソン博士夫妻に彼を加えることができるだろう。

31. では、「二人のペトラ旅行の思い出のために」(To Richard and Myra Mallock to remind them of their journey to Petra) となっている。日本語翻訳版にはこの人物たちの名前はない。さらに、この人物たちに関しては自伝の中で言及箇所が見つからない。しかし、作品の殺人事件の舞台がペトラである事から、彼らとの旅行がこの作品に反映されていることが分かる献辞となっている。この点から、これも「作品関係」に入れることができるだろう。

32. では「イラク及びシリアの遺跡調査に携わっている多くの友に」(Dedicated to My

many archaeological friends in Iraq and Syria) という献辞がある。これは、この作品を書く際に、夫のマローワンの発掘に同行し、現地で出会った考古学者たちが「技術的な詳細」を教えてくれただけでなく、「登場人物のモデルにも」なってくれたことへの謝辞である。この作品はバグダッドとティグリス川の発掘現場を舞台にしていることから、「作品関係」の献辞にも分類される。

さらに、33. では、「バグダッドのすべての友人たちに」(To all my friends in Baghdad) この作品を捧げている。『大事典』は、1928年に訪れて以来、彼女が考古学者の夫の「おかげで」、「知り尽くしている都市」で、彼女のこの都市との「つながりは、この作品の献辞でも明らかにされた」と解説している。『自伝』の中でもクリスティーは、「失われた満足の地」、「二度目の春」、そして「マックスとの生活」など3章に渡って詳しく話しており、作品名にもその都市の名前が含まれていることから、この都市との関わり合いの深さを感じることができる。この2つの献辞から、この地域とそこでの夫を通しての発掘体験がクリスティーの人生の中で大きな部分を占めていることが推測できる。これは第一形式の b. に分類できるが特定の個人が対象ではないのでここで扱うことにした。

以上の献辞は全て、クリスティーの私的メッセージが強いものである。それぞれの作品内容との関連性があることから「作品関係」にも分類できる。どちらかと言えば、一般読者に向けられたものではない。

c. 謎めいたコメント

特に、一見ただけでは謎めいたコメントが付いているものが9作品にある。それらは、34. “The Mystery of the Blue Train” (邦題『青列車の秘密』)、35. “Murder on the Orient Express” (邦題『オリエント急行の殺人』)、36. “The Mysterious Mr Quin” (邦題『謎のクイン氏』)、37. “A Murder Is Announced” (邦題『予告殺人』)、38. “Endless Night” (邦題『終りなき夜に生まれつく』)、39. “The Clock” (邦題『複数の時計』)、40. “Why Didn't They Ask Evans?” (邦題『なぜ、エヴァンズに頼まなかったのか?』)、41. “The Pale Horse” (邦題『蒼ざめた馬』)、42. “At Bertram's Hotel” (邦題『バートラム・ホテルにて』) である。

34. では「OFDの優れたメンバー、カーロットとピーターに贈る」(To the two distinguished members of the O.F.D. Carlotta and Peter) となっている。まず、このカーロットとはシャーロット・フィッシャー(クリスティーの娘がカーロと呼び始め、その名前で呼ばれるようになる)のことで、彼女の秘書兼子どもの家庭教師兼クリスティーの親

友の一人となる女性である。そして彼女がクリスティー家にやってくる頃に新たに飼い始めたワイヤーヘアテリア犬がピーターである。1926年はクリスティーにとって最悪の年で母親をなくし、最初の夫アーチボルド・クリスティーがより若い女性と恋に落ちたと宣言した年である。その後、離婚することになる。『自伝』の中でクリスティーは「人生の出直しをした」ので「友人たちの棚おろしをしなくてはならない」と思い、カーロと二人で友人たちを分類した結果が、この2つの勲章である。このOFDは何の略語であるのか、出版当時の一般読者には謎であっただろう。しかし、彼女の『自伝』を読むと、この略語は、“Order of the Faithful Dogs”の略語で、「忠実なる犬団」、または「忠犬勲章」であることが分かる。離婚に至るまでの苦しい時に、「側にいてくれた友人たち」に対する称号である。一方、「不実であることがわかった友人たち」は、“Order of the Rats”「ドブネズミ団」または、「ネズミ勲章」に分類された。これらの状況を知らない限り、この献辞の本当に意味するところは読者には分からないであろう。つまり、この献辞は読者向けではなく、クリスティーにとって極めて個人的なメッセージ、最初の夫との離婚が深い苦しみをもたらしたことを吐露するメッセージであり、自分自身や彼女の状況を知っている限られた人たちに宛てたものと言えるだろう。

35. では“To M. E. L. M. Arpachiya, 1933”となっている。単純に“1933”が1933年を意味していることは推測できる。しかし、残りの“M.E.L.M.”とこの論文では29.のところで言及しているが、この献辞だけを初めて見た読者には“Arpachiya”は謎となる。後者は、『自伝』を読み、それが地名であることが判明する。夫のマックスが発掘していたニネヴェの遺跡の近くにある「小さな墳丘」の名前がそのアルパチャである。クリスティーは「吹き出物のような墳丘アルパチャ」、「まだ誰も知ってもいなければ注意もしていないところだが、やがて考古学の世界全体に知れわたることになる名前である」^{a)}と書いている。ここは夫が自ら発掘することを決め、彼女と一緒に発掘のための土地使用交渉までした場所であり、クリスティーにとって思い出深い場所となったことがこの献辞から判断できる。この1933年はその遺跡の発掘を始めた年と考えられる。そこで、このアルファベットが夫のことであると言う推測ができる。しかし、一般的には彼女の夫はマックス・マローワンとして言及されている。最初と最後の“M”がそれに該当しそうである。その中間の2つのアルファベットに関しては、『大事典』の解説が役に立つ。それによると、クリスティーの夫の名前は、正式には「マックス・エドガー・ルーシアン・マローワン」^{b)}である。『大事典』もそれが夫のことであると述べている。まさに、『自伝』と『大事典』がなければ解けない謎献辞である。上記2つは、分類上「身内・親類関係」にも入

ることができる。また後者の 35. は「旅行・考古学関係」にも分類される。どちらも、クリスティーの私的思いが込められた献辞で、一般読者向けではない。

ところで、36. では「見えないハーリクインに」(To Harlequin the Invisible) とさらに謎めいたコメントが付いている。しかし、実は、これはこの短編集の題名と作品を読むことで簡単に解決できる。主人公の「古いパントマイムの道化役者ハーリ・クインを思わせる謎の人物」^{a)} の名前が、ハーリ・クインである。『アガサ・クリスティー 99 の謎』によると「自由自在に姿を隠し、突如現われては、また消える、超自然的な存在」^{b)}、つまり“invisible”である。『大事典』によると、クリスティーが作中の登場人物に作品を捧げたのは「これ 1 回きり」であることから彼女が「どれほど道化役者を愛好」^{c)} していたかがこれでわかると書かれている。

37. には、「『甘美なる死』を初めてご馳走してくださったラルフ及びアン・ニューマンにささぐ」(To Ralph and Anne Newman at whose house I first tasted 'Delicious Death') となっている。英語を訳せば、「『甘美なる死』を初めて味わった」と言う言葉を目にした読者は、料理名やワインやカクテルなどのアルコール類を連想するのが自然である。しかしその一方で、余りにも謎めいた言葉に、ミステリーファンは相手が死ぬことで甘美な思いに浸れる新たな殺人方法なのか思案することになる。実際には、これは、「ニューマン家主催のディナー・パーティー」^{a)} に出されたデザートの名前である。作品にも登場することから、そこで初めて読者は真相を知ることになる。『アガサ・クリスティー百科事典』によると、これは、「このうえなく濃厚なチョコレートケーキ」^{b)} である。

38. では「ノーラ・プリチャードに〈ジプシーが丘〉の伝説を始めて聞いたのは彼女からでした」(To Nora Prichard from whom I first heard the legend of Gipsy's Acre) とある。『大事典』によると、この人物は、クリスティーの「ただ一人の孫息子マッシュュー・プリチャードの父方の祖母」で、彼女から聞いたこの〈ジプシーが丘〉を中心にこの作品の話が展開する。この献辞もまた、作品を読むことで初めてこの「ジプシーが丘」と言う謎めいた言葉の意味を読者は理解できる。作品はこの様なことから生まれることを示唆する献辞である。

これら 3 つの献辞は、クリスティーが意識したかどうかは定かではないが、結果的には、読者に謎の言葉を投げかけ、作品を読むことでその謎を解いてもらうことになる献辞となっている。それゆえに、これらの献辞は、一般読者向けとも言えるし、そうでないとも言える。また「身内・親類関係」の 38. を含めてどれも内容の点から「作品関係」に分類できる。

その他に 39. では、「カプリースで味わった素晴らしいご馳走の楽しい思い出とともに旧友マリオに捧ぐ」(To my old friend Mario with happy memories of delicious food at the Caprice)、40. では、「ハインズを記念して クリストファー・マロックに」、41. では、「正義がおこなわれるのを見届ける機会を与えてくださったジョンとヘレン・マイルドメイ・ホワイト夫妻に」(To John and Helen Mildmay White with many thanks for the opportunity given me to see justice done)、さらに、42. では「私の本を、科学的に読んでくれている ハリイ・スミスに捧ぐ」(To Harry Smith because I appreciate the scientific way he reads my books) との献辞がある。これらの人物や場所等に関しては、『自伝』の中で、特に言及箇所が見つからないので謎のままである。その意味で、これらは一般読者向けではないと言える。

d. 身内・親類関係

彼女の身内に関するものは、43. “The Secret of Chimneys” (邦題『チムニーズ館の秘密』)、44. “After the Funeral” (邦題『葬儀を終えて』)、45. “Murder on the Links” (邦題『ゴルフ場殺人事件』)、46. “Giant’s Bread” (邦題『愛の旋律』)、47. “The ABC Murders” (邦題『ABC 殺人事件』)、48. “Murder Is Easy” (邦題『殺人は容易だ』)、49. “Dumb Witness” (邦題『もの言えぬ証人』)、50. “Postern of Fate” (邦題『運命の裏木戸』) の 8 作品にある。

まず 43. では、日本語翻訳版では「パンキーにささぐ」となっている。この人物はクリスティーの姉のマジ・ワッツのことである。これは名前だけの項で論じるべきであると思われるかも知れないが、原書版では、“To my nephew In memory of an inscription at Compton Castle and a day at the zoo” となっている。『大事典』でも、「甥へ。コンプトン城に、刻まれた語を見たり動物園で過ごしたりした 1 日の思い出に」という献辞を挙げているのでこちらの献辞の方が一般的に付けられていると考え、ここに入れることにした。ところで、この甥とは、姉のマジの息子のジェイムズ・ワッツ・ジュニアのことである。

彼に関しては、44. で「ジェームズへ アブニでの愉しき日々の思い出とともに」(To James in memory of happy days at Abney) という献辞もある。クリスティーは『自伝』の中でワッツ家の屋敷であるアブニー・ホールに言及し、特に食事とクリスマスの楽しい思い出を書いている。『大事典』によると、彼と一緒にそこで「クリスティーは何度」も「楽しく過ごした」場所であると説明されている。

45. では「探偵小説の熱心な愛好家であり、多くの有益な助言を与え、批評をしてくれた夫に」(To My husband a fellow enthusiast for detective stories and to whom I am indebted for much helpful advice and criticism) となっている。この献辞と、この作品の題名と内容が、クリスティーと彼女の最初の夫の共通の趣味のゴルフに関係していること、さらに作品が発表された年から、この夫とはアーチボルド・クリスティーであることが分かる。この頃は彼とまだ幸せな結婚生活を送っていたことが窺い知れる献辞となっている。

46. では、「わたしのもっとも真実な、よき友である母の思い出に捧ぐ」と母親のクララ・ミラーに捧げている。この献辞に関しては、この作品の翻訳版に付けられている「クリスティーとウェストマコット」の題名のつく翻訳者による後書きで、この作品に登場する二人の母親が、「それぞれ占有欲の強い女性」で、「自分自身の母がこうした母親のイメージと重ねられることを恐れたのではないだろうか」として、「彼女のデリケートな心遣い」から母親への献辞となったと分析している。

次に、47. では「いつもわたしを力づけてくれる読者 ジェームズ・ワッツに」(To James Watts One of my most sympathetic readers) となっている。彼はクリスティーの姉の夫で、彼は、第2タイプの献辞項目で既に言及しているが、『ポワロのクリスマス』(“Hercule Poirot’s Christmas”)でも献辞の対象になっている。

さらに48. では、「最初に本書を批評してくれた二人 ロザリンドとスーザンに」(Dedicated to Rosalind and Susan the first two critics of this book) となっている。このロザリンドはクリスティーの娘である。『自伝』を読むと、このスージーとはロザリンドの大親友のスーザン・ノースではないかと思われる。

次に、49. では、「友人たちのうちで最も忠実であり連れとして最も親しく、千匹のなかの一匹の犬といえる愛するピーターに捧ぐ」(To dear Peter, most faithful of friends and dearest of companions, a dog in a thousand) となっている。既に34. で言及しているが、母の死や結婚生活が破綻する中で彼女の側にいてくれた友人たちを「忠実なる犬団」と称し、その作品を捧げる相手に愛犬のピーターを選ぶほどクリスティーは犬が大好きである。自伝の中でも、「もしも生まれ変わり説と言うものが正しいならわたしの前世での姿はきっと犬であったにちがいない」とさえ言っている。その様な彼女にとって愛犬ピーターは身内とも言える存在と考え、この分類項目に入れることにした。

犬好きのクリスティーが、この他に犬に向けた献辞は、50. で、「愛犬ハンニバルと彼の主人へ」(For Hannibal and his master) である。『大事典』によると、実は、このハンニ

バルとはこの作品の主人公のベズフォード夫妻の愛犬の名前で、クリスティーが最後に飼った犬、トリークルがモデルである。そして、そのトリークルの「飼い主は、もちろんマックス・マローワンであった」と言う言葉でその献辞の解説を終えている。その記述から、間接的に実際のペットと夫に感謝の意を示していると解釈できるだろう。読者にはその献辞を文字通りに解釈してもらおう一方で、クリスティーの個人的な感情、私的メッセージをそこに隠したとも考えられる。ミス・マーブル作品でも人々の何気ない言動の中に事件を解く鍵が隠されている。そのような作品を書くミステリー作家であるからこそ、このように短い献辞にも少々遊び心を加えているのかもしれない。つまり、この献辞は一般読者向けであると同時に、クリスティーの私的メッセージの役目も果たしていると言える。ところで、この献辞を文字通りに解釈すれば、作品に登場する犬とその飼い主（主人公）が献辞の対象になっている。そこで、35.の項目で、主人公に献辞が捧げられたのはこの作品だけであるという『大事典』の記述内容を訂正する必要があるのではないかと考えている。

これらの45.から50.までの献辞は、まさにその時々クリスティーの思いや生活が反映されている私的メッセージである。50.を除いて、それらは、一般読者を意識したものではないのは明らかである。

e. 探偵小説観

第一タイプの第二形式の前書きの最後に、これまでとは少々異なる軽妙なコメントが付いたものを2つ挙げておく。それは、51. “One, Two, Buckle My Shoes”（邦題『愛国殺人』）と52. “The Secret Adversary”（邦題『秘密機関』）である。

51. では、「探偵小説とクリームを愛するドロシー・ノースに クリームのない時にこの作品が彼女の不満を補う役をすることを願いつつ」(To Dorothy North who likes detective stories and cream, in the hope it may make up to her for the absence of the latter!) という言葉が付いている。この人物については自伝の中で言及箇所が見つからないので、謎である。ところで、ここでの「クリーム」とはクリスティーが自伝の中で書いているが、「デヴォンシャー・クリーム」と呼ばれるものである。彼女は、「わたしの大好きなものは昔も今も、そしておそらくこれからもずっと、クリームであることにまちがいない^{a)}」と言い切っている。また別の箇所でも、生クリームやミルクとクリームが半々になった飲み物が好物で、ナンと一緒に「この飲みくらべを生涯つづけた^{b)}」と書いている。ところで、好きなクリームが食べれない時に探偵小説を読む事でその食べたい気持ち

を埋め合わせることができることを願っているという内容は、クリスティーが好きなクリームと好きな探偵小説を同じ次元のものと考えていることを示唆していると推測される。多分探偵小説マニアの中には好きな食べ物はそれぞれ異なるとしても共感を呼ぶ考えであるかもしれない。

次に、52.では、「冒険の喜びと危険を少しだけ感じてみたい、退屈な生活をおくっているすべての人たちに」(To all those who lead monotonous lives in the hope that they may experience at second-hand the delights and dangers of adventure.) となっている。この献辞は第一タイプの中で唯一クリスティーの署名入りのもので、明らかに、筆者として読者に向けたメッセージであることが分かる。この本を通して、冒険の喜びと危険さを味わえると読者にアピールする献辞である。読者を意識しているのは、一つにはこの作品は、彼女が出版した長編の第2作目で、まだ作家として地位も名声も確立されていない初期の段階にあったことが関係すると推測される。この2つの献辞は、彼女の探偵小説観を、前者は間接的に、後者は明確に示している。その観点から、これらは一般読者に向けられた献辞と言えるだろう。

おわりに

以上クリスティーの前書きを一つ一つ見てゆくと、彼女の前書きの特徴が浮かび上がってくる。まず第一に、前回も述べたが、前書きの数の多さから、彼女は前書きを作品に付けること、それも、単に名前だけでなく、短いコメントを付けたタイプの前書きも好きな作家であることが分かる。そして、それらの前書きの内容は、彼女の人生をその時々で反映したものが多く、時には、直接読者には分からないが非常にプライベートな内容(離婚の苦しい経験など)で、それを通して彼女の私生活が垣間見られる場合がある点もその特徴の一つに挙げることができるだろう。それゆえに、その対象は、旅や考古学関係、出版関係、作品の舞台化などで出会ったり、助けてくれた人々、また彼女を支えてくれた身内(ペットの犬も含めて)や親類、友人たちなど多方面に及んでいる。この点も、彼女の特徴と言える。また、作品の内容に直接関係する前書きも幾つかある。それは、特に「旅・考古学関係」に多く見られる。また、作品を読んだ後にその意味が分かる、謎付き前書きの形を採っているものもある。この点を、クリスティーが意識していたのかどうかは定かではないが、ミステリー作品にふさわしい献辞と言えるかもしれない。これは、前回論じているエラリー・クイーンの前書きに類似した特徴と言える。全体を通して彼女の前書き

は、前回論じた第二タイプの前書きの特徴と同じく多種多様な要素が含まれている。しかし、どちらかと言うと読者向けでないものが多い点は第二タイプの前書きとは異なる特徴である。

《註》

- 1) 『探偵小説における前書きの特徴 アガサ・クリスティー、ジョン・ディクソン・カー、エラリー・クイーン』、日吉和子、城西大学国際文化研究所紀要、第19号、2014年、pp.92-116。
- 2) Agatha Christie、(番号は本論文での登場順。引用・参照も添付)
 1. “Sad Cypress”、1940年、邦題『杉の柩』、恩地三保子訳、早川書房、東京、2004年発行、2010年4刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、HarperCollins Publishers, London, 2001。
参照：“An Autobiography”、1977年、HarperCollins Publishers, London, 1978、p.411。邦題『アガサ・クリスティー自伝』(上)(下)、乾信一郎訳、早川書房、東京、2004年発行、2009年2刷、(下)p.249。『アガサ・クリスティー大事典』、“The Complete CHRISTIE An Agatha Christie Encyclopedia”、Mathew Bunson、2000年、笹田裕子、ロジャー・ブライア訳、株式会社柵風舎、東京、2011年、p.92。
 2. “Lord Edgware Dies”、1933年、邦題『エッジウェア卿の死』、福島正実訳、早川書房、東京、2004年発行、2010年5刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、2007。
引用：“An Autobiography”、(a)翻訳版(下)p.375。(b)原書版p.476。
参照：“An Autobiography”、原書版p.467、pp.469-471、pp.474-476、翻訳版(下)pp.359-360、pp.363-367、pp.372-375。参照：『大事典』、p.26。
 3. “Five Little Pigs”、1942年、邦題『五匹の子豚』、山本やよい訳、早川書房、東京、2010年発行。原書版、Agatha Christie Signature Edition、同上。
参照：“An Autobiography”、原書版p.502、pp.512-516、翻訳版(下)p.430、pp.449-456。引用：(a)『大事典』、p.66。
 4. “They Do It With Mirrors”、1952年、邦題『魔術の殺人』、田村隆一訳、早川書房、東京、2004年発行、2011年4刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、2002。
 5. “The Murder at the Vicarage”、1930年、邦題『ミス・マーブル 最初の事件』(一般的題名は『牧師館の殺人])、厚木淳訳、東京創元社、2007年。原書版、Agatha Christie Signature Edition、同上。
 6. “Death in the Clouds”、1935年、邦題『雲をつかむ死』、加島祥造訳、早川書房、東京、2004年発行、2010年4刷。『大事典』では「古き友シビル・ヒーラーへ捧ぐ、愛情をこめて」(p.54)となっている。
 7. “Cat Among the Pigeons”、1959年、邦題『鳩のなかの猫』、橋本福夫訳、早川書房、東京、2004年発行、2011年4刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、同上。
 8. “Dead Man’s Folly”、1956年、邦題『死者のあやまち』、田村隆一訳、早川書房、東京、2003年発行、2009年3刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、同上。
 9. “Star Over Bethlehem”、1965年、邦題『ベツレヘムの星』、中村能三訳、早川書房、東京、2003年発行、2010年2刷。
 10. “Third Girl”、1966年、邦題、『第三の女』、小尾美佐訳、早川書房、2004年発行、2007年3刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、同上。
 11. “Passenger To Frankfurt.” 1970年、邦題『フランクフルトへの乗客』、永井淳訳、早川書房、2004年発行。原書版、Agatha Christie Signature Edition、2003。
 12. “The Moving Finger”、1943年、邦題『動く指』、高橋豊訳、早川書房、東京、2004年発行、

- 2011年4刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、2002。
引用・参照：“An Autobiography”、原書版 pp.512-513、翻訳版（下） pp.450-451。
13. “Three Act Tragedy”、1935年、邦題『三幕の殺人』、長野きよみ訳、早川書房、東京、2003年発行、2011年5刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、同上。
 14. “Murder in the Mews”、1937年、邦題『死人の鏡』、小倉多加志訳、早川書房、東京、2004年発行、2010年2刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、同上。
 15. “Elephants Can Remember”、1972年、邦題『象は忘れない』、中村能三訳、早川書房、東京、2003年発行、2011年3刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、同上。
 16. “The Thirteen Problems”、1932年、邦題『ミス・マーブルと十三の謎』、高見沢潤子訳、東京創元社、2011年、東京。原書版、Agatha Christie Signature Edition、同上。
参照：“An Autobiography”、原書版 pp.386-389、pp.410-415、p.417、pp.434-435。翻訳版（下） pp.202-206、p.219、pp.232-238、pp.247-257、pp.260-261、pp.294-296。
 17. “The Body in The Library”、1942年、邦題『書斎の死体』、山本やよい訳、早川書房、東京、2004年発行、2010年5刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、同上。
引用：“An Autobiography,” (a)原書版 p.487、翻訳版（下） pp.397-398、(b)原書版 pp.119-120、翻訳版（上） p.244。参照：出会うの頃：原書版 pp.386-389、pp.410-415、p.417、pp.434-435、翻訳版（下） pp.202-206、p.219、pp.232-238、pp.247-257、pp.260-261。
 18. “The Peril At End House”、1932年、邦題『邪悪の家』、真崎義博訳、早川書房、東京、2011年発行。原書版、Agatha Christie Signature Edition、2001。
引用：(a)“An Autobiography”、原書版 p.200、翻訳版（上） pp.404-406。(b)『大事典』、p.85。
 19. “Hallowe'en Party”、1969年、邦題『ハロウィーン・パーティ』、中村能三訳、早川書房、東京、2003年発行、2008年3刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、2001。参照：『大事典』、p.151。
 20. “Mrs McGinty's Dead”、1952年、邦題『マギンティ夫人は死んだ』、田村隆一訳、早川書房、東京、2003年発行、2009年3刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、2002。
引用：(a)『大事典』、p.180。参照：“An Autobiography”、原書版 p.490、p.530、p.533、pp.535-537、翻訳版（下） p.402、p.484、p.487、pp.492-493、pp.499-500。
 21. “Ordeal by Innocence”、1958年、邦題『無実はさいなむ』、小笠原豊樹訳、早川書房、2004年発行、2010年2刷。
参照：『大事典』、p.194。参照：“An Autobiography”、原書版 p.352、翻訳版（下） p.129。
 22. “A Pocket Full of Rye”、1953年、邦題『ポケットにライ麦を』、宇野利泰訳、早川書房、東京、2003年発行、2011年4刷。
参照：“An Autobiography”、原書版 p.290、翻訳版（上） p.585。参照：『大事典』、p.175。
 23. “The Labours of Hercules”、1947年、邦題『ヘラクレスの冒険』、田中一江訳、早川書房、東京、2004年発行、2008年、2刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、同上。
参照：“An Autobiography”、原書版 p.329、翻訳版（下） pp.77-78。引用：原書版 p.528、翻訳版（下） p.482。
 24. “The Man in the Brown Suit”、1924年、邦題『茶色の服の男』、深町眞理子訳、早川書房、東京、2011年発行。原書版、Agatha Christie Signature Edition、2002。引用(a)：『大事典』、p.116。参照：“An Autobiography”、原書版 pp.298-316、翻訳版（下） pp.17-50。引用(b)：“An Autobiography”、原書版 p.320、翻訳版（下） pp.60-61。引用(c)：“An Autobiography”、原書版 p.321、翻訳版（下） p.63。引用(d)：『大事典』、同上。
 25. “The Hollow”、1946年、邦題『ホロー荘の殺人』、中村能三訳、早川書房、東京、2003年発行、2011年5刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、同上。
引用(a)：『大事典』、p.177。引用(b)・参照：“An Autobiography”、原書版 pp.506-507、翻訳版

- (下) pp. 438-439。
26. “The Mirror Crack’d From Side To Side”、1962年、邦題『鏡は横にひび割れて』、橋本福夫訳、早川書房、東京、2004年発行、2008年3刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、同上。参照：『大事典』、p. 40。
 27. “Death on the Nile”、1937年、邦題『ナイルに死す』、加島祥造訳、早川書房、東京、2003年発行、2010年8刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、2001。引用・参照：“An Autobiography”、原書版 p. 401、翻訳版(下) pp. 229-230。参照：『大事典』、p. 128。この作品の翻訳版の献辞ではこの人物の名字はバーネットとなっている。また、原書の『自伝』の中でも“Burnett”と綴られている。この作品の原書版の献辞の“Bennet”は間違いと判断できる。参照：“An Autobiography”、原書版、p. 401。
 28. “Destination Unknown”、1955年、邦題『死への旅』、奥村章子訳、早川書房、東京、2004年発行。原書版、Agatha Christie Signature Edition、2003。
参照：“An Autobiography”、原書版 p. 529、翻訳版(下) pp. 484-485。
 29. “A Caribbean Mystery”、1964年、邦題『カリブ海の秘密』、永井淳訳、早川書房、東京、2003年発行、2010年5刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、2002。参照(a)：“An Autobiography”、原書版 p. 476、pp. 480-481、翻訳版(下) pp. 375-376、pp. 382-385。引用・参照(b)：『大事典』、p. 46。
 30. “Evil Under the Sun”、1941年、邦題『白昼の悪魔』、鳴海四郎訳、早川書房、東京、2003年発行、2012年6刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、2001。参照：『大事典』 p. 66。
 31. “Appointment with Death”、1938年、邦題『死との約束』、高橋豊訳、早川書房、東京、2004年発行、2009年4刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、同上。
 32. “Murder in Mesopotamia”、1936年、邦題『メソポタミヤの殺人』、石田善彦訳、早川書房、東京、2003年発行、2009年4刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、同上。引用・参照：『大事典』、p. 197。
 33. “They Came to Baghdad”、1951年、邦題『バグダッドの秘密』、中村妙子訳、早川書房、東京、2004年発行、2012年2刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、2003。
 34. “The Mystery of the Blue Train”、1928年、邦題『青列車の秘密』、青木久恵訳、早川書房、東京、2004年発行、2010年6刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、2001。
引用・参照：“An Autobiography”、原書版 pp. 423-424、翻訳版(下) pp. 272-274。参照：原書版 p. 350、p. 353、p. 362、翻訳版(下) pp. 124-127、pp. 130-131、pp. 149-152。
 35. “Murder on the Orient Express”、Agatha Christie Signature Edition、2007。
引用・参照：(a)“An Autobiography”、原書版 pp. 475-481、翻訳版(下) pp. 374-386。(b)『大事典』、p. 37。
 36. “The Mysterious Mr. Quin”、1930年、邦題『謎のクイン氏』、嵯峨静江訳、早川書房、東京、2004年。原書版、Agatha Christie Signature Edition、2003。
引用：(a)『アガサ・クリスティー百科事典』、数藤康雄編、早川書房、2004年発行、2011年、4刷、p. 88。(b)『アガサ・クリスティー99の謎』、早川書房編集部・編、早川書房、東京、2004年発行、2006年2刷、pp. 136-137。(c)『大事典』、p. 129。
参照：“An Autobiography”、原書版 p. 447、翻訳版(下) p. 321。
 37. “A Murder Is Announced”、1950年、邦題『予告殺人』、田村隆一訳、早川書房、東京、2003年発行、2010年6刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、2002。引用(a)・参照：『大事典』、p. 205。引用(b)：『アガサ・クリスティー百科事典』、p. 277。
 38. “Endless Night”、1967年、邦題『終りなき夜に生まれつく』、矢沢聖子訳、早川書房、東京、2011年発行。原書版、Agatha Christie Signature Edition、2007。
引用・参照：『大事典』、p. 37。

39. “The Clock”、1963年、邦題『複数の時計』、橋本福夫訳、早川書房、東京、2003年発行、2011年4刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、2002。
40. “Why Didn't They Ask Evans?”、1934年、邦題『なぜ、エヴァンズに頼まなかったのか?』、田村隆一訳、早川書房、東京、2004年。
41. “The Pale Horse”、1961年、邦題『蒼ざめた馬』、高橋恭美子訳、早川書房、東京、2004年発行、2010年2刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、同上。
42. “At Bertram's Hotel”、1965年、邦題『パートラム・ホテルにて』、乾信一郎訳、早川書房、東京、2004年発行、2012年5刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、同上。
43. “The Secret of Chimneys”、1925年、邦題『チムニーズ館の秘密』、高橋豊訳、早川書房、2004年発行。原書版、Agatha Christie Signature Edition、2001。
引用・参照：『大事典』、p.115。
44. “After the Funeral”、1953年、邦題『葬儀を終えて』、加島祥造訳、早川書房、東京、2003年発行、2012年4刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、同上。
参照：“An Autobiography”、原書版 pp.138-141、翻訳版（上） pp.282-287。
引用・参照：『大事典』、p.105。
45. “Murder on the Links”、1923年、邦題『ゴルフ場殺人事件』、田村義進訳、早川書房、東京、2011年発行、2012年2刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、同上。参照：『大事典』、p.67。
46. “Giant's Bread”、1930年、邦題『愛の旋律』、中村妙子訳、早川書房、東京、2004年発行。参照：『大事典』、p.6。引用・参照：同上作品翻訳版、p.647。
47. “The ABC Murders”、1936年、邦題『ABC殺人事件』、堀内静子訳、早川書房、東京、2003年発行、2012年12刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、2007。
48. “Murder Is Easy”、1939年、邦題『殺人は容易だ』、高橋豊訳、早川書房、東京、2004年発行、2011年3刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、2002。
参照：“An Autobiography”、原書版 p.494、翻訳版（下） p.410。
49. “Dumb Witness”、1937年、邦題『もの言えぬ証人』、加島祥造訳、早川書房、東京、2003年発行、2012年4刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、同上。引用：“An Autobiography”、原書版 p.89、翻訳版（上） p.186。
50. “Postern of Fate”、1973年、邦題『運命の裏木戸』、中村能三訳、早川書房、東京、2004年発行、2012年3刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、2001。引用・参照：『大事典』、p.24。
51. “One, Two, Buckle My Shoes”、1940年、邦題『愛国殺人』、加島祥造訳、早川書房、東京、2004年発行、2012年4刷。原書版、Agatha Christie Signature Edition、2002。引用・参照：“An Autobiography”、(a)原書版 pp.91-92、翻訳版（上） p.190、(b)原書版 p.139、翻訳版（上） p.283。
52. “The Secret Adversary”、1922年、邦題『秘密機関』、嵯峨静江訳、早川書房、東京、2011年発行。原書版、Agatha Christie Signature Edition、2007。